

## 標準委員会委員長からのメッセージ

## 「学会規格と標準化」



(株)テクノファ 取締役会長  
平林 良人

今般、日本品質管理学会規格「JSQC 日常管理の指針」が発行された。これは、「JSQC 品質管理用語」に次ぐ2つ目の学会規格である。標準委員会では、品質管理に必須な要素を規格化、標準化し、社会に広く発信することで、学会の使命の一つを果たしていきたいと考えている。

標準化とは、「自由に放置すれば、多様化、複雑化、無秩序化する事柄を少数化、単純化、秩序化すること」(JISハンドブック 57 品質管理)であるが、標準化がもたらす便益には、製品、プロセス及びサービスが意図した目的に適するように改善される(目的適合性、両立性、互換性、多様性の制御、安全など)、貿易上の障害がなくなる等が上げられる。

一口に標準化といっても、社内業務を統一共通化するような比較的単純な標準化もあれば、日本の得意とする技術を世界標準にするというような戦略的標準化もある。その中間には、工業会または産業界、学会の標準、そして日本工業標準(JIS)が存在する。

世界は移動手段の革新により、かつては物理的に困難であった地域同士が24Hもあれば世界中どこでも交流ができる。さらに、IT革新により、人は自分自身が移動しなくても、動画、音声などにより、あたかも現地に行ったかのごとく、他国の人と自由に交流できるようになった。

かような状況の今日においては、従来よりも比較的短期間に標準を見直さなければならない。他者との交流の活発化、さらにはニーズの多様化などにより、標準そのものの内容が陳腐化し、標準が頻繁に変更、修正を迫られるようになった。このような変更ニーズは、利害関係者からの要求事項の変化、変

更によることが多い。製品仕様、例えば材料、材料の物理的・化学的性質、成分、強度、形状、位置、状態など、それらの事由は様々であろうが、規制強化であったり顧客嗜好変化であったり、現代の企業はこのようなことへの対応に息つく暇がない。

一方で、製品仕様がどう変化しようが、それらを実現させるプロセス、特に基本的活動などに関しては変化はあまりない。逆に変化させてはならないものが多い。動作、手順、方法、手続き、目的を達成するための作業ステップなどは、いつの時代も大きく変わらないものである。

プロセスとは目標に到達するための道程であるが、それほど多くの道筋があるわけではない。目標が決まったなら、目標時点から現地点への道程をきめること(バックキャスト的)が良いやり方である。現地点から目標へのフォアキャスト的アプローチは必要十分条件を考えることになり、必ずしも効果的標準につながらない。

世界的な競争のさなかには、目まぐるしく変化する世の中の情勢に惑わされて、自分も変化しなければならないとの錯覚をすることが多い。企業側が変わらなければならないような変化の多くは、製品・サービスの仕様に関するものである。変化させなければならないものと、変化させてはならないものとの峻別をきちんとしておかなければならない。標準委員会が学会規格の対象に掲げる多くは後者のものである。

学会員の皆様方には、学会規格を(まだ2規格しかないが)広く社会に広めていただくことにご尽力いただけるようお願いしたい。